

# パチンコ博物館奮闘記

## お客様との 熱い交流が すべてだった

前パチンコ博物館館長 牧野哲也

昨年の暮れも押し詰まった12月30日、東京・東上野「パチンコ村」の名物だった「パチンコ博物館」が閉館した。当初予定の「12月29日閉館」を、地方から駆けつけるファンの要望で1日延ばし、多くの人に惜しまれながらの賑やかな打ち止めだった。「パチンコ文化を後世に正しく伝えたい」との思いから生まれた博物館だった。営利事業ではないので派手な宣伝をすることもなく、ファンはほとんどクチコミでやって来た。資金面では終始ピンチの連続で、一部企業などの支援でしのぎにしのいだり、ついに力尽きた。博物館に劣らず「名物」だった館長の牧野哲也さんに、開館から閉館まで6年4か月の奮闘を寄稿してもらった。

平成16年2月頃のことだった。当時勤務していた茨城の「パーラーWAKO」チェインの会長から、「夏から上野に勤務」と唐突に言

設することを快諾して下さった会社で、上野に本社ビルを新築することになった。お前はそこでお世話になればいい」とのことだった。

### バカモン！お前以外に

それまでの「パチンコ博物館」は、「パーラーWAKO」チェイン4店舗に併設される形で運営しており、その規模は店舗により15〜40台ほどで、さほど大がかりな規模ではなかった。それが今度開設される「新・パチンコ博物館」は、1フロアに150台近くものスケールで展示ができるという。私はあまりにも突然のことで頭を

クラクラさせながら会長に尋ねた。「で、その新・パチンコ博物館の責任者にはどなたが」今にして思えばとんでもなく問抜けな質問だった。「バカモン!! お前以外にそんな所の館長を誰がやるんだ」……もったものである。

### 開店も自宅もバタバタ

それから工期を経て数か月、私は、千葉……と言っても周囲ではカエルが大合唱しているような片田舎から、新天地「上野パチンコ村」へと単身やって来た。工事はす

に佳境を迎えていたのだが、厄介な問題があった。展示室のショーケースが大きく、ビルの階段から上げるのができないという。そこで急遽、ショーケースを上下真つ二つに切断して、ビルの窓から搬入するという「トンデモ工法」が考えられた。そして、搬入後に合体させることで、遅れ気味となっていた博物館の骨組みがようやく完成した。台の搬入、備品の搬入で、何とかギリギリ9月初旬のオープンというスケジュールは死守された。

が、この時私は重大なことを忘れていたのである。……それは、「自宅の引越」。千葉の片田舎からでは通勤もおぼつかないため、私は通勤圏である埼玉県北部へと転居する予定だったが（注・なぜもっと近い所にしないかと言うと、自宅にも多くのパチンコ台や資料を保管している私としては、交通至便な東京近郊のアパート、マンション住まいは無理なのである）その転居先を決めるのがままならない状態で連日、上野での仕事に参加していたのである。このままではホームレス。本来ならばゆくりと物件を検討したいところで

あったが、そんなことは言っていられない。……私はあたかも立ち食いそば屋のメニューのように、比較検討の余地のないいくつもの物件の中から1つの借家を選ぶと、転がり込むように入居した。それこそが現在の我が家である。

## 当初は客のいないシエフ

そんな、まさしく紆余曲折の末、お世話になることになった(株)山下商会さんの東京本社ビルが竣工。

それに合わせる日程で、8月末、「パチンコ博物館」もどうにかお客様を受け入れられる態勢が整った。9月1日にプレオープンし、同4日からは一般の方をお迎えしてのグランドオープンと相成った。しかし開館即、順風満帆とは行かなかった。もともと、営利事業ではない当館は派手な広告宣伝をするでもないため、当初のお客様の数は、今にして思えば淋しい限りであった。人々に存在が知られるようになるまでのしばらくの間は、わざわざ足を運んでくれた人よりもむしろ通りすがりに興味本位でのぞいて行く……といった人が多かったように思う。「パチンコの歴史に対する興味」には、いくらで

も答えられる私だが、通りすがりの人の世間話には付いて行けない。その姿は、腕をふるいたくても、それを味わってくれるお客様がいないシエフにも似たものだった。

そんなことが続いたある日、ある雑誌が取材に来てくれて、そのライターさんが書いてくれた記事の内容が、まずは当館の存在と、その館長である私を、一躍有名にしてくれた。その内容を要約すると、「館内に展示されたパチンコ台もすごい。しかし見ているだけでは白米のよ

うなものに思える。そこで館長の存在が大きいのだ。その知識たるやカレーのスパイスのようなもの。展示品をながめているだけではパチンコ博物館の魅力はわからないだろう。是非訪問して館長という不思議なスパイ

スを体験あれ」……というようなものだったと思う。それ以来この雑誌を読んだ方が多く来館され、その口コミ、さらに他のマスコミへの飛び火……といった相乗効果で、「パチンコ博物館」はしだいに全国のパチンコファンに知られることとなった。

## 常連とサウナ泊まりも

こうなってくればしめたもの。専門知識を必要とする質問ならドゥンと来いである。結局、以来6年

あまりの間、私は専門知識を要する質問で返答に窮したことはおよそ記憶になく、連日「道場破り」さながらにやって来る日本中のマニアもバツバツと斬って捨てた。ただ、そうしたやり取りをした後は爽やかに対応した。スポーツのように相手の健闘を称えることはもちろんのこと、わざわざ遠方から足を運んでくれた人には閉館時間が過ぎても対応したし、時には「お腹も空きましたし、外でお食事でもしながら……」と酒食を共にすることも少なくなかった(もちろん自腹である)。

パチンコへのお客様の熱い想いを聞いているとつい嬉しくなり、また、自分も負けじと熱く語る。気が付けばお互い、帰ることさえ忘れてしまい、仲良く上野のサウナ泊を余議なくされたこともある。それでも私は損得抜きで特に「この人は！」と見込んだ豊富な知識を有するファン、真面目な姿勢でパチンコを研究しようとする人には全力で接してきたつもりである。

こうしてお客様と交流するうちに、徐々に当館にはリピーターも増えていった。館内の展示もさることながら、ことさら私に会うこ



ビルの3階、パチンコ博物館の出入口。入って右側が「試し打ちコーナー」、左側が展示コーナーだった

古い機種「試し打ちコーナー」でファンたちと、古い資料を調べに来る人もいた



と、質問をぶつけることを目的と

したりピーターも多くなった。ちなみに、最高リビート記録は、何

と6年間で約300回。つまり、

ほぼ毎週必ず来て下さるとい

もいた。その情熱は、筆舌に尽

し難いものがあり、私も野球の

手に例えるならば、このような

お客様には「打たれまい」とい

心の注意をはらって、きわどい

コースへと投げ続ける思いであ

ったが、それがまた、自身のレ

ベルアップにもつながったと、大

している。

## 孤独を埋めた人たちも

一方、そのようなコアなファン

とは別に、1日パチンコ台に開

かれて、のんびり、ゆつくりと過

したいという、マイペース派の

お客様も増えていった。当館は、

小額の入場料を頂いてはいるが、

それで1日利用することが可能と

あって、暇な人は、時に館内で

たた寝をしたり、食事を挟んで

お、終日パチンコと戯れていた。

このタイプのお客様は、

比較的高齢者も目立

ったが、中には恐ら

く当館で孤独な時間

を埋めているのであ

ろうと拝察される方

もおり、私は極力、

そういう人には雑談

であっても話しかけ、

時に茶菓子などを振

舞って、淋しい思い

をさせまいと配慮し

てきたつもりであった。

今回、当館が閉館す

るにあたって、も

っとも話が切り出し

辛かったのが、この

ような高齢者ユーザーの方々だ

た。「ウチがなくなったら、この

人たちは何処へ行くのだろうか？」

と思うと胸が詰まる思いがした。

ところで、当館を訪れる人は、

何も一般のパチンコファンばかり

ではなかった。パチンコ台を生

産する当事者たる、パチンコメー

カーや販社の方々も続々とやって

来た。比較的回った台数が少な

かった展示台の前で立ち止まっ

ておお客様に声をかけたら、「この

台、私が設計したんです」と言

われてビックリしたことがある。ま

た、あるメーカーの人から「この

台をリメイクしたいんですが、

すでに当社には実機が残っていない

ので貸して頂けませんか」とい

う要請を受け、対応したこともあ

った。出来上がったリメイク機を

実際に見た時には、まさに「タマ

ゴが先か、ニワトリが先か？」とい

うような思いだった。

## 私だからこそその「出前」

さらには地方の遊技業協同組合

さん、各種業界団体さんからも、

イベント、行事等での台の貸出の

要請をたびたび頂き、台と共に私

も現場に「出動」したこともあ

た。言わば「出前パチンコ博物館」。

こうした場合は、昔の市場性を考

慮し、その地域で使われていた機

種を展示しなければ来場されるお

客様も、今一つ盛り上がりがない

だろう。そこで私ならではの知識が

生きてくる。まだ、遊技機の検定

が都道府県でまちまちだった昭和

59年以前の全国の遊技機の設置

状況を自らの足で確かめている私

だからこそ、その地域のお客様に

心底懐かしんでもらえる機種を、

膨大なコレクションから厳選して

参して行った。にわか仕立ての「

旧台展示会」とはレベルが違うと

負していたが、その思惑通り、

来場者が涙を流さんばかりに喜ん

でくれた。それを見ると、本

当に長年にわたって遊技機の研究

を尽くし、全国に足を運んで「地

方版」遊技機の収集にも手を抜か

なかった自分の努力が報われる思

いがしたものだ。

この世の中広しといえども、自

分にしかできない仕事…今とな

ってはパチンコ機の機構も進化し、

昔のパチンコ機とは隔世の感があ

るが、その、昔のパチンコを再び

打って遊んで頂けるようにアナ

ぎず、閉め過ぎず」をモットーとした釘状態の補整を心掛けられる技術の持ち主が、果たして現在どれほど残っているのだろうか、仕事をしながらふと考えてしまうこともあった。

## 足が遠のく今のホール

話は少々それるが、ここ数年、これほどの熱狂的パチンコファンである私が、パチンコの参加日数、参加時間も過去最低を更新し続けていく。これは私に限った話ではなく、かつての、特に熱心なユーザーには共通した現象だと言えよう。パチンコ業界としても実によく由々しき問題だと思う。

ではなぜホールから足が遠のいているのか、その理由を考えてみたい。私がホールに行く頻度がガクンと減ったのは、現行基準機が出回ってからであると断言できる。つまりベースが減って時間当りの投資スピードが過去最高となったことに反比例するかのようにより頻度に行く頻度が減った。ベースは低い、一度当たったら確変、確変……さらには時短引き戻し……と、投資がかかるだけでなく、遊技時間が読めなくなったのも大きな理

由だ。

考えてもみてほしいが、キチンと社会生活を送っている人ほど、時間の制約は多いものだ。であるからこそ、遊技が一定時間内で完結するようなゲーム性でなければ、遊びたくても遊べないのが実情である。その意味からも現行の遊技機は、果たして一般ユーザーの視点に立っているのか疑問がある。これでは「ちよいの間の娯楽」として成立せず、終日ホールで過ごしてもいいというような、ヘビーユーザー視点であるという諷りを免れないであろう。

## ベースほぼ同じの異常

話を再びベースの議論に戻すと、どれもこれもベースがほぼ同じというのもパチンコ史上例のない異常事態だ。ベースというものも、ユーザーの「予算」「持ち時間」という各々の事情に鑑み、高低いろいろな機種があつて然りではないだろうか。個人的な見解で恐縮であるが、昨今のようにゲーム性はセブン機が寡占化し、どんなスペックでもベースは大差ない……この状況を貸玉料金の高低だけで解決しようという考えには賛同しか

ねる。そんなことより、ネックであるならユーザーとしては「無制限」「台移動自由」といった低ベイス化の元凶はもう返上してもいいから、「納得できるベースで、多彩なゲーム性のパチンコを楽しめる」環境を整備してほしいと切望する。よく「休眠ユーザーの掘り起し」という言葉を耳にするが、以上のような点を解決するように努めなくては、それもおぼつかないであろうと考えると、そこである。

## 儉約徹底して保有拡大

当館の名物コーナー「昔のパチンコ台の試し打ち」もそうだったが、やはり、オールドファンなどは、ただやみくもに玉が出るばかりでも喜ばないものだ。自分の狙った通りに玉が出てこそ楽しい。この思いを理解しているからこそ、私はゲームセンターのパチンコでは到底味わうことのできない実践さながらのリアリティーをお客様に提供するように心を砕いてきたつもりである。その想いは、やがて当館の常連様を中心に浸透し、「館長の釘でなければ遊ぶ気がしません」と、わざわざ地方からたびたび訪れてくれる人も増えた。

おこがましくも一応入館料も頂いているというのに、そういう常連様の中には毎回「入館料だけでは私の気が済まないから……これどうぞ」と言つて、地方の名産品やら私が日頃好物だと公言してしまっているせい、お酒などもたくさん差し入れて頂き、本当に感謝に堪えない思いがした。

また、お客様がそうやって盛り立ててくれるものだから、なおさら、そのお客様方に満足して帰ってもらいたい……という気持ちが芽生え、お客様の望む台あらば仕事の合間にも全国を飛び回って、未だ所有していないパチンコ機を探して回った。6年前、当館を開館した時点では360種だった保有機種が、今や1000種、延べ台数では1400台を数えるまでに「成長」したのは、ひとえに「お客様の喜ぶ顔が見たかったから」というのが理由である。決して金銭的には余裕があるとはいえない生活の中から、自分が私生活で使う物も節約し、徹底した質素儉約を実践し、浮いた費用は惜しみなく失われゆくパチンコ文化の保護と研究に注ぎ込んだ。私はまだいいが、それに付き合わされる妻はた



昭和39年生まれ、千葉県出身、神奈川大学法学部中退。小学生のころからパチンコに親しみ、19歳でパチンコ店員となる。遊技機収集家として知られ、保有台数は延べ1400台。2004年9月から2010年12月末まで、東京・東上野のパチンコ博物館館長を務めた。著書に「特選パチンコ絶版名機大図鑑」など。

楽しそうに展示を説明する牧野さん

まったものではない。いつしか、妻と顔を合わせると「浪花恋しくれ」という演歌を口ずさむようになり、夫婦でお互いを「春団治」「お浜」と呼び合うようになっていた。「パチンコ博物館」を無事に運営してこれたのも、この「ど阿呆春団治」を除で支えてくれた「お浜」の内助の功あつてのことと、一言礼を述べたい。

## 軌道に乗りかけたが

さて、そんな「パチンコ博物館」であるから、当然、財政状態は荒波を漂う小舟に等しかった。自慢ではないが、開館以来、金銭的に恵まれたことなど、ただの一度もなく、いつも「スポンサー探し」に追われていた。開館して5年目に入ろうかという頃が、最大のビ

ンチであつたと言える。どうにもこうにも運営資金が無く、もはや閉館は時間の問題かとも思われたのだが、この時はホール経営企業を中心とした業界関連企業数社の経営者の方が、見るに見かねてほぼポケットマネーで支援を申し出てくれた。本当に有難かつた。何が何でもパチンコ文化を後世に伝承させなくてはいけない、という私の理念が風前の灯といったところで、再び赤々と炎を吹き上げた瞬間だつた。

そして経済的危機がとりあえず回避され、さあ、運営態勢を盤石な物にすべく、それからは業界団体にも支援を要請して回つた。その中で昨年は「全日本社会貢献団体機構」様より、業界団体関連としては初となる助成金が年額100万円交付されることとなつた。当館史上初の公的な支援を得て、心強い限りであつた。それに続き、他団体様からも支援の内諾を得て、これにて当館にも、ようやく日の射す思いがした矢先、入居させて頂いているビルの事情により、どうしても従来の賃料での存続が認められないというお話が浮上した。好事魔多しとは、まさにこんなこ

とを言うのだろうか。もちろん私としては、存続のため、それなりの手を尽くしたが、どうしても、引き上げとなる（と言うより、今まで相場よりはるかに安い賃料でスペースを提供して頂いてきたのだが）差額の負担がおぼつかず、年末に至り、断腸の思いではあつたが、「パチンコ博物館」を閉館することを決意するに至つた。

## 閉館知り続々、ただ涙

ご利用頂いてきたお客様方、お力添えを賜ってきた関係者各位には、申し訳ない事態となつてしまつた。こんな時はひっそりと閉館の日を迎えるものだと思つていたが、閉館の日が近づくとつれて、来館者がどんどん増してきた。「館長、長い間お疲れさまでした」「またいつか再開して下さいね」。そんな言葉と共に、私のデスクはお客様方からの多くの差し入れでみるみるいっぱいになった。鳥肌が立つような感激。そして、館内を目を輝かせるお客様方を見て、この6年余り、私がお客様のために続けてきた努力が全て肯定された思いがして、人知れず涙した。

12月30日、最後の閉館。朝から全国からのお客様でこつた返す館内。そして、本当に本当に最終最後の午後5時、多くのの方が「その瞬間」を見届けるために残つてくれた。挨拶を終え、淋しさもあつたが、正直、開館以来、当館をほぼ1人で切り盛りしてきた責任者としては、大きな事件や事故も無く閉館の日を迎えることができたことには、安堵の思いも大きかつた。

以上が、正確に言えば6年と4か月、「パチンコ博物館」を運営し、のべ3万人強の来館を頂いた館長であつた私の壮絶な奮闘の概要である。無論、不備だつた点や反省材料も山ほどあるが、「パチンコ博物館を作ろう！」と言つてみたところで、そのイメージが具体的に湧くという人は、ベテランの業界人でもそう多くはないはずだ。「井戸を掘る努力」というものが、どういふものなのかを身を以つて学ぶことができたことは、他の人々に「パチンコ博物館」の具現化をお見せできたことと共に、自らにとつても、人生の貴重な経験となつた。改めて関係者各位に深謝申し述べさせて頂きたい。